
緋弾と最強の姫

UKAMU

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

緋弾と最強の姫

【Zコード】

Z3384Z

【作者名】

UKAMU

【あらすじ】

神の手違いにより死んんでしまった神奈木弥生 神に3つ願いを叶えてやるといわれやよいは一つしか願いを言わなかつた・・・そして転生・・・

転生した時間はちょうどキンジがチャリジヤックをさている時だつた弥生は2年から転校してきた転入生として入学する。弥生・キンジ・アリアこの三人が出会うとき物語が静かに回りだす。作者です。これが初めて書くネット小説です。駄文になると思いますがよろしくお願ひします。一日に一度ペースで書いていきます。

弾幕めとこひなのプロローグ（前書き）

UKAMU「初投稿です」

弥生「それだけ？」

UKAMU「うんー」

弾篭めどりの名のプロローグ

「？？」「……あれ……」

弥生『うへへん』

「？？」「……起きる……」

弥生が田を覚まし声のするところを見る

弥生『あなたは？』

神『ワシは、神じや』

弥生『そつですか……』

神『驚かんのか？』

弥生『まあ死んだのは分かつてますから……』

回想

弥生は夙^{なき}大学の2年生であった。

学校の帰りいつもどうりに帰路についていただが・・・
後ろからトラックが突っ込ん出来て当たったと思つた瞬間意識が飛
んだ
きずいたらここにいた。

回想終了

神「スマンお主はあそこで死ぬハズなかつたのじや」

弥生『ふえ？ どうゆうひ』とですか？』

神「お主はワシの手違いで死んでしまつたのじや」

弥生『せつですか・・・』

神「怒らんのじやな」

弥生『だつてもう起きてしまったことじやない仕方ないことよ』

神「そつか・・ではお主を転生させよ」

弥生『転生？』

神「そうじやそしてお主が転生する世界は・・・緋弾のアリアの世界じや」

弥生『えつ？ 本当？』

神「うむそしておつ願いを叶えてやるつ

弥生『じやあRランク並みの戦闘力だけでいいや』

神「それだけでいいのか！』

弥生『うん！』

神「欲のないやつは
『せじひ』

弥生『転生するにせよ、死んでしまっては、どうも

神「そこの扉をくぐればよー

弥生「分かったじあねー、神様『

弥生は扉をくぐっていった

神「行つたか・・・・よしー、おやつの容姿を絶世の美女にしておへ
か」

弾幕めぐらしのプロローグ（後書き）

UKAMU 「どうでしたか？」

UKAMU 「次は、アリアとキンジに会います」

主人公設定（前書き）

UKAMU「主人公設定の巻~~~~~」

弥生「眞面目にやれ~~~~~」

ガスッ！！

UKAMU「いた！（、；；；）」

UKAMU「グリップで叩く」とないじやないか

弥生「眞面目にやらないからです」

主人公設定

名前 神奈木 弥生
かんなぎ やよい

性別 絶世の美女「性別じゃない〜」

身長 130・5（アリアより10センチ位小さい）

体重 作者がどこかともなく狙撃されたため白紙だった

スリーサイズ 作者が後ろからデザートイーグル撃ち抜かれたため
白紙だが血で
バストはDと書かれていた

容姿 10人中10人が振り返り男女問わず一目惚れしてしまうほど
可愛い 髪は、腰まで届くロング 色は、少し緑がかかった青
目はほんわかした目で紫水晶色
アメジスト

性格は、明るいし優しい基本敬語だが怒らせるとめちゃ怖い 家事・
炊事完璧にできる

備考・武貞高に転入してきたなぜかキンジと同じ部屋になる。

神にRランク並みの力を貰つたので片手でデザートイーグルがうてる
アサルトレン・アッシュベル
強襲科では後に最強の姫として異名を取る

武器・デザートイーグル2丁・2本の小刀・M700ライフル

主人公設定（後書き）

UKAMU「いや～～ 小説書く事がこんなに疲れるとはおもいませんでしたよ～～」

弥生「今更何言つてるの？」

UKAMU「すいません前に書いた小説で次は、アリアとキンジに会つを書く予定だったのに設定を書いてしまいました。

弥生「あちや～～」

UKAMU「次こそは、アリアとキンジに会つを書かせてもらいます

プロローグキンジSHIDE（前書き）

UKAMU「は」と「う」と「う」原作介入です。」

弥生「もっと頑張れ~~~~~^~」

UKAMU「え~~~今日はキンジSHIDEで書いていきます。」

弥生「え~~~~~」

UKAMU「すいません予定を変更して次は武偵憲章を書きまーす」

プロローグキンジSHDE

——キンジSHDE

——空から女の子が降つてくると思うか？——

昨日似た映画では降つてきたんだ

まあ、映画とかマンガならいい導入かもな

それは不思議で特別なことが起こるプロローグ

主人公は正義の味方にでもなって、大冒険が始まる

ああ、だからまずは空から女の子が降つてきてほしい！

・・・・なんていふのは、浅はかって言つもんだけ

だつてそんな子、普通なワケがない

普通じやない世界に連れ込まれ、正義の味方に仕立てられる

現実のそれは危険で、面倒なことに決まっているんだ

だから少なくとも俺、遠山キンジは

空から女の子なんて降つてこなくていい

俺はとにかく普通に、平凡な人生を送りたい

だからまず転校してやるんだ。このトチ狂った学校から……

・・・・・ピンポーン・・・・

慎ましいドアチャイムの音で田が覚める。

・・・・・いけね。どうやら俺は、トランクス一丁でねていたらしい

枕元の携帯を見ると 時刻は、朝の7時

キンジ「こんな朝から誰だよ・・・・」

居留守を使ってやろうか

だが、あのチャイムの慎ましさ（・・・・）にイヤな予感がする。
そもそも、とワイシャツをはおり制服のズボンをはくと、
俺は一人で住むこの広いこのマンションの部屋を渡り・・・・
ドアの覗き穴から、外を見た
するとそこに・・・・やつぱり

キンジ「・・・・う」

白雪が、立っていた

何やつてゐるんだこんなところで

ガチャ

キンジ「白雪」

白雪「キンちゃん」

キンジ「その呼び方、やめなさい」

白雪「あつ・・・」ぬんね

星伽白雪

キンちゃんといつ呼び方でわかるよ」俺といつは幼馴染だ

キンジ「とにかく入れ」

白雪「お・・・お邪魔します」

キンジ「で、何しにきたんだよ」

白雪「い、いれ」

和布の包を解^{わふ}して出てきた漆塗りの重箱を俺まえにさしだす

キンジ「これ作るの大変だつたんじゃないかな?」

白雪「う、うひんちゅうと昇起^{こうき}したただけ」

白雪の作った弁当を食べ腹がいっぱいになつたといふ

キンジ「えつとこつもありがとな」

白雪「えつ、あ、キンちゃんもありがとな」

土下座つぽくなつた白雪の胸をつこ・・本當につけ眼^{まなこ}てしまつた
くつ黒はないだらう!・

じわつ

体の芯に血が集まるような、あな、危ない感覚がしてきた
ダメだ！

禁止しているんだ、俺は
いつこののを自分に

キンジ「・・・」ひかりおも

ふつ、びゅありセーフだったみたいだな

白雪はソファーに放られていた武偵高の洋ランをとつてきた

白雪「キンちゃん今日から一緒に2年生だねはい防弾制服」

俺がそれを羽織ると、今度は拳銃も持つてくる

キンジ「・・・始業式ぐらいい、銃は持たなくていいだろ？」

白雪「ダメだよキンちゃん、校則なんだから」

校則・・・『武偵高の生徒は、学内での拳銃と刀剣の携帯を義務づける』、か

ああ、普通じゃない（・・・）

ウンザリするほど普通じゃないんだよ武偵高はー！

白雪「それにまた『武偵殺し』みたいのが出るかもしねーし・・・」

キンジ「～～『武偵殺し』？」

白雪「ほら、あの連続殺人事件のこと」

キンジ「でもあれは逮捕されたんだろ?」

白雪「でつ、でもまた模倣犯^{もほうつかん}が出るかもしねないし」

キンジ「分かつ分かつたこれで安心だ!」

俺は、溜息をつき、ナイフも～～兄の形見の、バタフライ・ナイフ
だ～～
棚からだしてポケットに収める

白雪「キンちゃんかっこいい、やっぱり先祖代々の『正義の味方』
って感じだよ」

キンジ「やめてくれよ・・・ガキじゃあるまこし」

キンジ「・・・俺はメールチェックしたら行くから、お前は先に行
つとけ」

白雪「あつ、じゅあ、そのあいだにお洗濯とかお皿洗いとか～～

キンジ「いいからつー!」

白雪「・・・は・・・はいじゃあ先行つくるね」

・・・ふつ

やつとめんどくさいのが帰つてくれたぜ
だらだらどメールを見る

だらだら、だらだら・・・と時刻は7時55分になつていた
しまつたちょっとだらだらしそうだ

～～5時8分のバスには乗り遅れた

～～～生涯

生涯俺はこの7時5時8分のバスに乗り遅れたことを悔やむだらう

なぜならこのあと、空から女の子が降つて来てしまったんだから

神崎 かんざき
・H・アリアが・・・・・

そして不思議な少女 神奈木弥生と出会ってしまうのだから

プロローグキンジSHIDE（後書き）

UKAMU 「どうでじょつか」

弥生「全然原作と変わらないじゃない」

UKAMU 「まあ、そりゃ～～」

UKAMU・弥生「感想お待ちしておつま～す」

武偵憲章（複書モ）

OKAMO「うるわしいじとて武偵憲章ですか」

弥生「わ～～～」

OKAMO「ねかられせに棒読みじやん」

弥生「だつてこつになつたら本文書を始めるの？」

OKAMO「今週出させ」

武偵憲章

- 1条 仲間を信じ仲間を助けよ。
- 2条 依頼人クライアントとの契約は絶対に守れ。
- 3条 強くあれ。但し、その前に正しくあれ
- 4条 武偵は自立せよ。要請なき手出しこそ無用のこと。
- 5条 行動に疾くあれ。先手必勝を~~いと~~すべし。
- 6条 自ら考え。自ら行動せよ。
- 7条 悲觀論で備え、樂觀論で行動せよ。

8条 任務は、その裏の裏まで完遂すべし。

9条 世界に雄飛せよ。人種・国籍の別なく共闘すべし。

10条 諦めるな。武偵は決して、諦めるな。

武偵憲章（後書き）

UKAMU「今回はなしです」

1弾（前書き）

UKAMU「はーやつと本文だな~~~」

弥生「・・・・・すう」

UKAMU「寝てるし」

UKAMU「じゅあ1弾行きます」

1弾

＝＝＝弥生SIDE＝＝＝

弥生「……うーん」には?

弥生「……知らない天井……」

(私は……そうだ! 神様に転生させてもうつたんだ)

弥生「ん? 机の上に紙が……」

神『お主がこれを読んでいたことは無事転生出来たのじゃな……。さてお主の能力じゃがRランク並みにしといたぞ』さらに鍛えればRランク以上になれるぞ後お主の容姿じやがこちらで絶世の美女にしといたぞ』

弥生「マジですか……」

神『では、第一の人生を楽しんでくれあと時間軸じやがチャリジャックの一回まえにしといた』

弥生「ありがとう神様」

神『おおっと忘れとつたお主のぶきじやがわしから『ザートイーグル2丁とM700

と小刀一本を用意した制服と一緒にアタッシュケースにはいつておるからな

地下に練習場があるそりで一日練習するといいだろ

ではやうらばだ』

神からの手紙は消えた

弥生「ケースは・・・セ」が」

アタッシュケースは、ベットの横にあった

弥生「まあ、とりあえず顔洗おつと」

弥生は、2階の寝室から1階の洗面所で顔を洗い自分姿を見た

弥生「えつー可愛い・・・」

弥生「つと自分の姿に見惚れている時じやなかつた」

弥生は、2階で武器を持ち地下で一日練習した

ペペペッペ ペペペッペ ペペペ

カチッ

弥生は田覚ましの音で田が覚めた

弥生「ヽ(〇)ヽファアア」

弥生「ん~」

背伸びをして布団から出た

そのあと軽く食事をして

背伸びをして布団から出た

そのあと軽く食事をして

M700を背負い、デザートイーグルを太もものホルスターに小刀を背中のホルスターに（M700以外は、アリアとしまつ場所は一緒です。）

7 7 7 7 7 7 7 7 7 7 7 7 7 7 7 7 7

第3男子寮前

7時58分発のバスに乗った

周りの学生が『可愛い・・／／／』と顔を紅くしながら呟いていた

體育倉庫

弥生「ちょっと早かったかな・・・」

卷之二

弥生は近くの茂み隠れて原作キャラの到着を待つた。

ドーン！

弥生「ひや！」

いきなり爆弾の音がして思わず変な声を出してしつまつた。

弥生「やつと原作入できる・・・」

ドン！ガラガラ・・・

弥生「やつと原作入できる・・・」

弥生は、ドキドキが止まらなかつた

ダダダダツ

キンジたちを追つて来たセグウェイがシズエをぶっぱなした・・・

~~~~~

セグウェイがフ機ともキンジによつてバラバラにされ

キンジたちがいいあいをしながら出でてきた

キキイーー

キンジたちの横からわらう3台のセグウェイがで出来た

(・・・危ない!)

弥生は、茂みから飛び出し一言

弥生「伏せてえへへへー!」

弥生はデザートイーグルを抜き放ち

ガウン! カラン・カラン・カラン

一気に3台のセグウェイをバラバラにした

昨日の練習で身に付けた技『ジヒットショット』

(ふう・・・良かつたキンジが無事で・・・)

=====キンジSHODE=====

(なんなんだあいつは・・・)

(あんな芸当できる奴この学校にいたか?)

キンジは、一気に3台のセグウェイ壊した芸当をやってみせた  
奴の顔を見た

キンジ「可愛い・・・」

弥生「じゃあね〜〜〜」

キンジ・アリア「ちよ、待つて・・・」

キンジ「俺もつと」

俺は、今の隙にアリアから逃げる

アリア「待ちなさいよ〜〜」

これが俺、遠山キンジと後に最強の姫レンタツシユベルと称えられる神奈木弥生と  
緋弾のアリアで恐れられる神崎・H・アリアとの

硝煙の一オイにまみれた、最低最悪の、出会ってだった。

GoForTheNEXT!!

## 1弾（後書き）

UKAMU「どうでしようつか」

弥生「すうへへ」

UKAMU「まだ寝てるし」

UKAMU・弥生「感想待つてます」

UKAMU「つて起きてるし」

弥生「それでは、次は2弾でお会いしましょう」

## 2弾（前書き）

UKAMU「更新遅れてすいませんでした。」

弥生「なんでおくれたの？」

UKAMU「パソコンが・・・」

弥生「・・・」

UKA・弥「2弾行きます」

## 2弾

（～2・A教室前廊下～）

——弥生サイド——

あの後弥生は2・Aの前に来た  
『先生が読んだら来て』と言つて  
教室に入つていった・・・

アリア「・・・」

（怖！―ものす）に殺氣が・・・

先生「じゃあ入つてきてください」

二人『はい』

——キンジサイド——

（俺が鬱々な思いに浸つていると）

先生「去年の3学期と今年に転入してきたカーワイイ子達から血口  
紹介よ」

先生「じゃあ入つてきてください」

そしてはこうってきたのは・・・

——弥生サイド——

アリア「先生、あたしはアイツの隣に座りたい」

ビシーとキンジに向かつて指をさす

(ふふつ、キンジ君、顔引きつってる)

武藤「よ・・よかつたなキンジーなんかわからんがお前にも春が来たみたいだぞ！先生！俺、転入生さんと席変わりますよ」

弥生「先生、私は空いてるところでいいですよ」

先生「はい」

私は、廊下側の一一番後ろに座った

クラスの人「「「ワーワーワー」」」

(何かめっちゃ騒いでいるけど・・・)

ガウン！ガウン！

(ーーーー)

アリア「れ、恋愛だなんて・・・くだらない！」

全員覚えていなさい！そういうバカなこと言う奴には・・・  
風穴開けるわよ！」

~ ~ ~ ~ ~ ~ ~ ~ ~ ~ ~ ~ ~ ~ ~ ~ ~

理科棟屋上

冒  
休  
み

弥生 - ここかな？

ギンジ・ユウガノ

弥生・あー！したした

ノノノノ

強生のシルバーバンク君はあれども、この二つは思って

(あれ?なんかあかくなってる……まあいしか)

衍生 -

キンジ「！－！－なりなんで・・・・・」

弥生「先生の資料を勝手にみたの」

キンジ「おこ#!..」

弥生「あははつー・キンジ君が怒つても怖くなーい」

キンジ「つーーーーー(かわいいヤバイちょっとヒステリアモードが)  
」

弥生「あつーもひすぐ鐘が鳴る・・じゃキンジ君も遅れないよひ  
ね」

キンジ「おひ、おこ」

ヒトヒト弥生は、壁上を走る

キンジ「なんなんだよ・・・」

キンジは胸のもやもやが取れなかつた

~~~~~

~~男子寮~~

——キンジサイド——

キンジ「はあ~~~~~」

(今日せこりあつたな~~~でも神奈木さんだけ

なんんで俺の「」としつてたのかな?)

ガチャ!

(あれ? 鍵で入れないはずなのに)

? ? ? 「あの～～お邪魔します」

セレにたつていたのは・・・・

とれど、少し前にやかのぼる

（職員室前廊下）

——弥生サイド——

先生「はい、これが寮の鍵です」

弥生「ありがとうござります。」

弥生「え～と男子寮2001号室・・・」

弥生「え――先生! なんで男子寮なんですか?」

(なんでなんでなんで? ? ? ? ?)

弥生はすっかり混乱してしまった

先生「なんか勝手に会議で決まっちゃいまして・・・
でもキンジ君つていう子もいるし」

弥生「は～～～まあ・・・いいです」

～～男子寮2001号室前～～

――弥生サイド――

弥生「なんでおつにもよってキンジ君との・・・」

(でも、いいかな)

カードを通して

ガチャ

弥生は意を決して入った

弥生「あの～～お邪魔します」

キンジ「なつなんで（なんか）ればつかまつてるな」

弥生「今日から一緒に住む」となった神奈木弥生です」

キンジ「はああ――――?」

弥生「よろしくね キンジ君」

弥生は、わざと微笑んだ

キンジ「うへへへへへへ（またなつやう・・・）」

弥生「キンジ君どうしたの?」

とやつ取りしてこないと

ピンポン

弥生「でなくていいの?」 上田使い

キンジ「――――――」

ピンポン

ピーポーピーポーピーポーピンポン

キンジ「だあー、ひめせん」

キンジはわざと玄関のところに行つた

数分後

アリアを連れてキンジ戻ってきた

アリア「あら、あなたも同じ部屋なのね」

弥生「そうですよ～～」

アリア「じゃあ弥生・キンジあんたたちあたしの奴隸になりなさい」

G o F o r T h e N E X T ! ! !

2弾（後書き）

UKAMU「はー」

UKAMU「2弾終わりました」

UKAMU「キンジ君に会ってきました」

キンジ「ども」

UKAMU「弥生に惚れちゃいましたか？」

キンジ「ひ――そんなわけがないだろ。」

UKAMU「あいつ、ひいてるからね」

キンジ「――――――」

UKAMU「でも、まだね」

3弾(複数用)

UAKIZU「3弾行け!!」

3弾

～～2001号室コビング～～

——キンジサイド——

(・・・ありえん・・ありえんだるー。) じつー

アリアは、キンジたちの部屋に入り
二人に向かつて奴隸宣言したのだ

——弥生サイド——

(ふふつー。キンジ君困惑してゐる)

キンジ・アリア「~~~~/~~~~(可憐かわい)」

弥生「? ?」

(あれ? なんで紅くなつてんだろ? ?)

アリア「と、とにかく奴隸になつてもううんだからねー。」

アリア「ほりー。わざと飲み物ぐらり出しなさいよー。無礼なやつね

ー。」

ぼふ！

盛大にスカートをひらめかせながらアリアはソファーに座った

アリア「コーヒー！エスプレッソ・ルンゴ・ドッピオ！砂糖はカンナ！1分以内！」

弥生「アリア多分こじじゃそんなの無理だよ」

キンジがインスタントコーヒーを出した

アリア「？」

カップに鼻をちかづけてクンクンやつた

アリア「これ本当にコーヒー？」

（知らないんだよね）

キンジ「それしかないんだから有難く飲めよ」

アリア「ずず・・・変な味、ギリシャコーヒーに似てる？」

（何かもめ合つてゐるけどまいいかな ちょっと武器の手入れしてお
い）

弥生、武器手入れ中～～

アリア「ででけ！～～」

(よし！終わった・・ん？もひそんなとじへ。)

キンジが出てつた後アリアに質問された

アリア「弥生」

弥生「なに？」

アリア「あんたあやのどうやったの？」

弥生「愚問ですね、たまたまですよ」

アリア「・・・まいわ

適当にはねぐらかしておいた

アリア「お風呂はいつてくるわ」

弥生「ん」

--2001号浴室--

—アリアサイド—

ちやほん！

アリア「はあ～～

(弥生は何を考えているかわからない
でも可愛いなあ～～／＼＼＼＼＼＼＼＼
とにかくキンジと弥生をあたしのパーティーにいれないと・・・)

～～2001号室リビング～～

――弥生サイド――

(良かつたうまくキンジ君に接触できて・・・)

弥生「神様ありがと～」

弥生は、窓から空を仰いだ・・・

～～男子寮前コンビニ内～～

――キンジサイド――

キンジ「はあ～～～」

(わからんねえなんでアリアと弥生がくるんだ?
でも弥生は鍵もってたしな～～)

弥生といたい自分がいる

(「いやいやどうにかなりんかな～～」)

~~~~~

——夜中

——弥生サイド——

キンジの声が暗闇の中から聞こえてくる

キンジ「起れねえ～～

弥生「ねみれないの？」

キンジ「うわ！ 弥生かびっくりした

弥生「たぶんお兄さんのことだよね？」

キンジはなんでわかったの？ って顔をしていた

弥生「あなたのおにこさんがしたことは間違つてないよ

弥生は良く通る声で言つた

弥生「あれ？」

キンジ「・・・あひゅ～

キンジは寝てしまつていた

弥生「ふふつ！かつ」いいなあ～～ふあ～眠くなってきた

弥生はそのままキンジのベッドで寝てしまった

~~~~~

~~~~~翌日放課後

-----神奈木弥生ランク報告書-----

強襲科 Rランク アサルト 教師のコメント「すごいなでできた的全部真ん中で打ち抜いたぞ」

狙撃科 Rランク スナイプ 教師のコメント「キングレンジ絶対半径4030mだと・・・」

諜報科 Sランク レザート 教師のコメント「なぜ私の弱点を知っているんだ？」

尋問科 Sランク ダギュラ 教師のコメント「聴取させたやつが廃人になつてたでも聴取成功だな」

通信科 Sランク コネクト 教師のコメント「すごいですね一人で何人のオペーレーションしてる」

情報科 Sランク インフォルマ 教師のコメント「アメリカの国防省にハックして情報とちやてる」

インケスタ 探偵科のランク 教師のコメント「あー」こと「あざわらわ」

鑑識科 Sランク 教師のコメント「俺でも見逃した指紋が分かることは・・・」

装備科 アームド Sランク 教師?のコメント「あーいのだーーあややは弟子入りしたいのだーー」

車輌科 ロジ Sランク 教師のコメント「武藤と張り合えるやつがこの世にいるとは・・・」

衛生科 メディカ・救護科 アンビュラス Rランク

教師のコメント「たった1時間で400人も直せるとは・・・」

超能力捜査研究科 (SSR) Rランク

教師のコメント「適性は電撃だった Gはフロだった」

特殊捜査研究科 (CVR) Rランク

教師のコメント「自分の可愛さを生かして完全に落としてましましだね」

総合ランク RRRランク なおこれを隠し神奈木弥生はSランクとして扱う

G O F o r T h e N E X T ! ! !

### 3弾（後書き）

UAKMU 「えいじょうか」

弥生「チートです」

UKAMU 「まあいいでしよう」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3384z/>

---

緋弾と最強の姫

2012年1月12日18時51分発行